

## ヨブの問いへの答え

「人は死んでも、再び生きるだろうか？」  
ヨブ記 14:14

ヨブが投げかけたこの迫力ある問いほど、万人の関心を集めるテーマはありません。通常、誰も死にたいとは思いませんが、人類の予見の及ぶ限り、死はすべての人類を待ち受けていることを誰もが悟っています。したがって、すべての人の心にあり、多くの人の口に上る問いは、死後の生命があるかどうかということです。

古来より、人々は愛する者の死に対する悲しみや、大敵である死の前での自らの最終的な滅びという確実性の中で、恐怖を和らげ、あまりにも悲劇的に現実的なこの事実を否定するために、あらゆる種類の哲学を編み出してきました。彼らは、死は見た目とは異なるものであるという信念を受け入れてきました。すなわち、死は人間が別の、より崇高な生命の領域へ、あるいは場合によっては永遠の苦しみという状態へと入るための手段であるということです。

死者はどこにいるのか？人が死ぬと何が起こるのか？死者は生者よりも生き生きとしているのか？数千年前、義人ヨブは冒頭の聖句にある言葉を問いかけた。「人は死んでも、再び生きるだろうか？」ここで神の預言者は、愛する人の喪失を嘆き

、全人類と同様に、避けられない死の到来を恐れてきた何十億もの人々の代弁者となった。

ヨブは、この問いに対する答えに個人的かつ切実な関心を抱いていました。なぜなら、彼はまさに神に「私を死なせてください（）」と願ったばかりだったからです（ヨブ記14:13）。ヨブは生きることに疲れていたわけではありませんが、苦しみによって疲れ果て、そのような状況下での人生に価値があるのかと自問するほどでした。ヤコブはこう記しています。「あなたがたは、ヨブの忍耐について聞いたことがあるでしょう」（ヤコブの手紙5:11）。ヨブには忍耐が必要でした。なぜなら、神は彼に激しい災難を許されたからです。彼の羊の群れ、牛の群れ、そして家族はすべて滅ぼされました。彼は健康を失い、全身を覆う忌まわしい皮膚病に冒されました。ついには妻までもが彼に背き、「神を呪って死ね」と言いました。（ヨブ記2:9）

しかし、ヨブには神を呪うつもりは全くなかった。なぜこれほど大きな苦しみを受けることを許されたのか理解できなかつたにもかかわらず、彼は神を信頼していた。当然のことながら、もしそれが神の御心であるならば、苦しみからの解放を求め、こう祈った。「ああ、あなたが私を墓に隠してくださり、あなたの怒りが過ぎ去るまで私を隠しておいてくださり、私に定められた時を定めて、私を覚えていてくださるなら！」（ヨブ記14:13）

このように神に死を許してくださるよう求めた後、ヨブは、もし神がその祈りに応え、彼を死へと

導かれるとしたら、そこには何が伴うのかという問いについて深く考えた。そこで、冒頭の聖句にある言葉を用いて、彼はこう問いかけた。「人は死んでも、再び生きるだろうか。」ヨブは自身の経験と感情の立場から問いかけました。しかし、神の預言者である彼の言葉は神の靈感によるものであり、死後の生に関するこの問いは、その主題に関する神の御言葉の真理にかなう形で表現されていることがわかります。

ヨブが「もし人が死んだら、かつてないほど生き生きとしているのだろうか？」と尋ねたわけでもなく、「もし人が死んだら、それは天国へ行ったのか、それとも苦しみを受ける場所へ行ったのか？」と尋ねたわけでもないことに留意することが重要です。ヨブは、人が死ぬと（死んだ）ことを知っていた。だから彼が尋ねたのは、「彼は再び生きるだろうか？」ということだった。こうして、死後の命は死者の復活にかかっているという、聖書の偉大で根本的な真理が私たちの注意に喚起される。死後の命への希望があるのは、死が存在しないからではなく、神が御自身の強大な力を使って死者を生き返らせると約束されたからである。ヨブは、さらなる苦しみから逃れるために死を許されるなら、神が後に彼を生き返らせてくださると信じていました。彼はこう言いました。「私の定められた日数が尽きるまで、私は（死の中で）待ち続け、私の変容（死から生への）が来るのを待ち望みます。あなたが呼びかけられれば、私は答えます。あなたは御自分の御手のわざを喜ばれるでしょう。」ヨブ記14:14,15

## 復活への希望

ヨブが抱いていたこの復活の希望こそが、新約聖書においてこれほど明確かつ慰めとなる確信をもって示されているものである。使徒パウロはこう記している。「死が人を通して来たように、死者の復活もまた人を通して来たのである。」（コリント人への第一の手紙15:21）。この箇所において、完全な「人」であるアダムは神の律法に背き、自分自身とその子孫に死の罰をもたらした。完全な「人」であるイエスは、死において罪人の身代わりとなり、それによって復活という手段を通じて、アダムの子孫を死から解放することを可能にされた。これが、パウロが「罪の報酬は死である。しかし、神の賜物は、私たちの主イエス・キリストによる永遠のいのちである」と記した時の意味するところである。（ローマ人への手紙 6:23）

## なぜ混乱が生じるのか？

死後の世界に関する多くの混乱の根源は、エデンの園に遡ります。神はアダムにこう言われました。「善悪を知る木の実を食べてはならない。それを食べれば、必ず死ぬ。」（創世記2:17）。その後、サタンは蛇を通してエバにこう問いかけました。「神は、『園のすべての木の実を食べてはならない』と仰せになったのですか？」エバは、不従順の罰として死が待っているという神の言葉を、その通り確認しました。創世記3:1-3

するとサタンはエバに答えて言った。「決して死ぬことはない。」（創世記3:4）。これは、創造主が言われたことを露骨に否定するものであった。

事実上、サタンは、不従順の罰として死が下ると神が言われたことを、嘘だと非難したのである。おそらくサタンは、何らかの方法で、人間に死の刑を科すという神の御計画を阻止できると信じていたのだろう。もしそうだったとしても、彼はすぐにその試みが無駄であることを悟った。なぜなら、人類は死に始めたからである。

しかし、サタンは自分が間違っていたことを認めようとはしなかった。その代わりに、彼は人間の代理人を通じて、「死は見た目のようなものではない」「死など存在しない」という嘘を広め始めた。人々にこれを信じ込ませることができれば、エバに「決して死ぬことはない」と言った時、彼が真実を語っていたことになる。つまり、死んだように見えるだけであり、死んだように見える時こそ、かつてないほど生き生きとしているのだ、ということになる。

イエスはサタンについて、「彼は偽り者であり、その父である」と語られた。（ヨハネ8:44）。言い換えれば、サタンは最初の嘘を生み出したのであり、それはこれまでに語られた中で最も破壊的で、広範囲に及ぶ嘘であった。エデンの園に端を發するこの虚偽は、あらゆる国や宗教の人々の心の中で、死に関する真理を歪めてきた。一方、神が「あなたは必ず死ぬ」という言葉で示された真理を信じている者は、それに比べてごくわずかである。

## 「独立した実体」という虚偽

人間の肉体は死んで元素に還るということは、誰の目にも明らかであった。サタンは、この点に関して人々を欺くことは到底不可能であることを知っていた。それゆえ、彼は、人間の有機体の中に肉体とは別の何かが存在し、それは死の際に肉体から逃れ出て生き続けるとする考えを広め始めた。キリスト教を標榜する界限では、この定義しがたい何かは「不滅の魂」と呼ばれている。

古代エジプト人はこの見解を信じていた。後に、ギリシャやローマの哲学者たちもこれを採用した。使徒たちが眠りについた後、異教の哲学者たちによって、この考えはキリスト教会に持ち込まれた。表現は様々ではあるが、人間の中には死なない何かが存在し、したがって死などないというこの理論は、キリスト教徒であれ非キリスト教徒であれ、ほとんどの宗教信者にとって共通の信念となってきた。

聖書によれば、この考えはソロモン王の時代でさえ多くの人々の間に広まっており、ソロモン王が真理をもってこの誤りを論破している様子が見て取れる。彼は次のように記している。「人の子らに起こることは獣にも起こる。両者に起こることは一つである。一方が死ぬように、他方も死ぬ。いや、両者とも同じ息を持っている。それゆえ、人は獣より優れているわけではない。すべては空しい。すべては一つの所へ行く。すべては塵から出たものであり、すべては再び塵に帰る。人の霊が上へ上っていくこと、また獣の霊が下へ下って

地へ帰ることを、誰が知るだろうか（誰が証明できようか）？」（伝道の書 3:19-21）

ソロモンは、死において人と獣は等しく、すべてが同じ息、すなわち伝道の書3章21節で同じヘブライ語が訳されている「**霊**」を持っていると断言し、いかに明確に神の真理を述べていることか。このように真理を提示した後、彼は「誰が知るだろうか [それを否定できるだろうか] 」と問いかける。彼は明らかに、周囲の異教の国々が、死など存在せず、体は死ぬものの「**霊**」は「上」へと昇り、生き続けるとするサタンの嘘を信じていることを知っていた。しかし、ソロモンは、これが真実ではないことを示している。むしろ彼は、死において、人と動物は同じであると述べている。人間の優位性は、神が復活において死んだ人間を生き返らせることを約束しておられるが、下等な動物に対してはそうすることを約束しておられないという事実にあります。

## 「不滅の魂」は聖書的ではない

「不滅の魂」という表現は聖書のどこにも登場せず、また聖書は、人間の体の中に独立した実体が宿っており、体が死ぬとそこから逃れて別の場所で生き続けるとは、微塵も教えていない。聖書で「魂」という言葉が初めて使われるのは、創世記2章7節である。この節では、神が「地の塵」から人を造り、「その鼻の穴にいのちの息を吹き込まれた。こうして人は生ける魂となった」と記されている。

この節は、人が「魂を持っている」のではなく、「生ける魂となった」と述べていることに注目してください。「生ける魂」とは、単に生き物、すなわち生きとし生けるもののことであり、この聖句が明らかにしているように、それは「いのちの息」と有機体、すなわち肉体との結合によって生じるものです。肉体は魂ではありません。いのちの息も魂ではありません。神の力によって、その息が肉体に命を与えるとき、この二つの結合が「生ける魂」を生み出すのです。

ソロモンは、人と獣はすべて一つの息を持っていると言いましたが、彼は正しかったのです。大洪水で滅ぼされた人間と下等動物について、次のように記されている。「地の上を動くすべての肉なるもの、すなわち鳥、家畜、獣、地を這うすべての這うもの、そしてすべての人が死んだ。鼻の穴に命の息があるすべてのもの、乾いた地にいるすべてのものが死んだ。」創世記7章21、22節

動物の被造物も、人間を生きさせるのと同じ「いのちの息」によって生きているため、動物もまた「生ける魂」である。この重要な真理は、翻訳の不整合によって、聖書をざっと読む読者からは隠されている。例えば、創世記1章24節にはこうある。「神は言われた。『地は、その種類に従って生き物を生み出せ。家畜、這うもの、地上の獣、その種類に従って。』そして、そのようになった。」この箇所における「生き物」という語句は、創世記2章7節でアダムについて言及されている「生ける魂」と訳されているヘブライ語の単語と全く同じものを訳したものである。つまり、「生き物

」と「魂」の両語は、ヘブライ語の「ネフェシュ (nephesh)」の訳語なのである。翻訳者たちは、聖書が根拠としていない人間と動物との違いを確立しようと努めたため、下等な動物を指す場合には「生き物」という語を用い、人間を指す場合には「魂」という語を用いたのである。ソロモンが「一方が死ぬように、他方も死ぬ」と記したのも無理はない。

正しい考えはソロモンによって明確に述べられている。彼は人が死ぬ時に何が起こるかを説明し、「そうすれば、塵は元のように地に帰り、霊はそれを与えた神のもとへ帰る」と記した。(伝道の書 12:7)。この箇所を示された単純な真理は、「霊」という言葉に対する誤解によって、多くの人々の心の中で混乱を招いている。この言葉はヘブライ語の「ルアハ (ruach)」を訳したものであり、単に「息」を意味するか、あるいはこの場合のように、目に見えない生命の力を指すに過ぎない。

この箇所は、人が死ぬ時に、意識を持った実体が肉体から抜け出し、天の神のもとへ引き上げられるなどということ、微塵も示唆していない。上記の聖句で使われている「帰る」という言葉は、そのような解釈の可能性を排除しています。体は塵に帰るのです。なぜなら、体は塵から来たからです。もし「霊」が神のもとへ帰る別の存在であるならば、それは以前神と共に住んでおり、一時的に地上に来て人間の体に宿ることを許されていたということになります。そのような結論がいかにも不合理なことでしょうか！

しかし、ソロモンの死の定義は、人間の「生ける魂」あるいは「存在」に関して聖書に記されている事実と、どれほど整合しているのだろうか。肉体と息がそれぞれの源へと戻るとき、「生ける魂」、すなわち「存在」はもはや存在しなくなる。それは死んだのであり、死こそが罪に対する罰である。エゼキエル書18章4節は、簡潔な言葉でこう宣言している。「罪を犯す魂は、必ず死ぬ。」

## 「眠り」と表現される死

神は死んだ人間を生き返らせると約束されているため、聖書は死んだ人々を「眠っている」と表現しています。この聖書の重要な真理は、マルタとマリアの兄弟であるラザロの死について語ったイエスの言葉によって強調されています。イエスは弟子たちに、「私たちの友ラザロは眠っている」と言われました。弟子たちは、イエスが通常の眠りのことを言っているのだと思ったので、イエスは彼らに率直にこう言われました。「ラザロは死んだ。」ヨハネ11:11-14

ここでイエスは、神の言葉の基本的な教えの一つを明らかにされました。ラザロは死んでいたのに、同時に「眠っている」のでもありました。神がアダムに、不従順は死を招くと「あなたは必ず死ぬ」と言われたとき、神は命の消滅を指しておられました。この命の消滅は、神が依然としてご自身の人間の被造物を愛し、人類の贖い主であり死からの救い主となるために、愛する御子を賜物として与え、彼らに贖いを備えてくださらなかったならば、永久的なものとなっていたでしょう。ヨハネ3:16,17 ; テモテへの手紙第一2:3-6

イエスは、ご自身の「肉」、すなわち人間性を、「すべての人の身代金（ギリシャ語：相応の代価）」として、「世のいのちのために」捧げられました。（ヨハネ6:51）。完全な人であったアダムの不従順は、そのすべての子孫に罪と死をもたらしました。神の正義は、「命は命で償う」こと、すなわち、アダムに課せられた不従順と死刑の代償として、完全な人であるイエスの死を必要としました。イエスの死は、アダムのための「身代金」、すなわち相応の代価を提供しました。その結果、「神の恵みによって、すべての人のために死を味わう」のはイエスであったのです。（出エジプト記21:23；ローマ5:12-19；へブル2:9）。こうして、アダムとその子孫に対して宣告された死の刑罰を支払うための備えがなされた。すべての人々は今も死に続けているが、キリスト・イエスを通して与えられた贖いにより、死者の復活が約束されている。それゆえ、聖書は彼らの生命のない状態を「眠り」という言葉で表現している。

眠っている者は外界を認識しておらず、死んでいる者も同様である。彼らは何も見ず、何も聞かず、何も知らない。聖書はこう述べている。「生きている者は、自分が死ぬことを知っているが、死んだ者は何も知らない。」（伝道の書9:5）。眠っている者は目覚めることができる。それゆえ、死の中で「眠っている」者もまた、目覚めることができ、そして目覚めることになる。イエスがラザロについて言われたように、「私は彼を眠りから覚ますために行くのです」（ヨハネ11:11）。死の中で眠っているすべての者は、神の力によって、この地の新しい日の朝に目覚めさせられるのです

。だからこそ、私たちはこう読むのです。「夜は泣くことがあっても、朝には喜びが来る。」（詩篇30:5）

## マルタの慰め

イエスとベタニヤの小さな家族——マリア、マルタ、そしてラザロ——は、特別な友人同士でした。ラザロが病気になった時、イエスと弟子たちはベタニヤから少し離れた場所にいました。姉妹たちはラザロの病気についてイエスに知らせを送りましたが、イエスはすぐには彼らのところへ行きませんでした。イエスは二日間待ちました。その後、イエスはラザロが死んだのではなく眠っているのだと告げ、彼を「眠りから起こしに行く」と宣言されました。（ヨハネ11:1-15）

イエスが家へと近づいてくると、マルタは出迎えた。彼女は優しく咎めるように言った。「主よ、もしあなたがここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょう」（ヨハネ11:21）。マルタは心を痛めていた。これはイエスが彼女を慰める絶好の機会であり、イエスは実際にそうされた。この大きな苦難の時に、主はマルタにどのような心強い慰めの言葉をかけられたのだろうか。イエスは、よく似た状況下で語られるような、「マルタよ、あなたの兄弟は本当に死んだわけではない。彼は単に外側の殻、つまり肉体を脱ぎ捨てただけだ」と彼女に言っただろうか。本当のラザロはかつてないほど生き生きとしている、と彼は言っただろうか。イエスはマルタに、おそらくラザロの「魂」が近くを漂っているのだ、と言った

だろうか。彼は「マルタよ、死などないのだ」と言っただろうか。

イエスは、そのようなことは何も言われませんでした。イエスは以前、弟子たちに「ラザロは死んだ」と告げておられました。ですから、今になってマルタに「お兄さんはかつてないほど生き生きとしている」などと言って、この真実と矛盾するようなことはなさりませんでした。イエスがマルタを慰めるために言われた言葉は、神の御言葉全体の証しと一致するものでした。ラザロが実際に死んでいることを知っていながら、イエスはマルタにこう言われました。「あなたの兄弟はまた生き返る。」ヨハネ**11:23**

マルタは、この言葉が具体的に何を意味するのか確信が持てなかった。イエスが他の人々を死の眠りから目覚めさせたことは知っていたし、イエスに「あなたが神に何を願っても、神はそれを与えてくださいます」と言ったこともあったが、イエスはその時、神に兄を死の眠りから目覚めさせるよう願うかどうかは確信が持てなかった。彼女は答えた。「私は、最後の日の復活の時に、彼が再び生き返ることを知っています。」ヨハネ**11:22,24**

マルタは、すべての死者が総てよみがえる日があり、その時にラザロも死の眠りから目覚めることをはっきりと知っていた。彼女は旧約聖書に記された約束に精通しており、イエスの教えを敬虔かつ信仰をもって受け止めていたため、全人類にとって復活という輝かしい希望があることを知っていた。また、マルタは、その総てのよみがえりが

「最後の日」に起こることも理解していた。「最後の日」とは、多くの人が思い込んでいるような「終末の日」ではありません。ここでの「日」という言葉は、罪と死から人類を贖い救うという神の偉大な計画における、ある期間、ある時を指しています。

神の救いの計画には、キリストの初臨の前後を問わず、様々な期間、すなわち時代が存在します。これらは準備の時代であり、神は、キリストの統治下にある神の義の王国という神の計画の最終段階において、イエスと協力する者たちを選定し、備えてこられました（）。（エレミヤ23:5；マタイ6:10）。その時、神の計画は、死者の目覚めと、その時点でキリストの王国の律法を信じ従うすべての人々への完全な命の回復によって、その完成を迎えるのである。

マルタは、神の計画におけるこの最終の時代、すなわち「終わりの日」について知っており、その時には自分の兄弟や、すでに亡くなったすべての人々が、死の眠りから目覚めることを知っていた。しかし、マルタは、イエスが「あなたの兄弟は再び生きる」と言ったとき、これがその意味なのかどうかは分からなかったし、イエスもまた、自分の当面の意図が何であるかを彼女に直接説明しなかった。その代わりに、イエスはこう答えられた。「わたしはよみがえりであり、いのちである。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがない。」（ヨハネ11:25,26）。イエスは自らを「よみがえりであり、いのちである」と明

言することで、終わりの日にすべての死者を目覚めさせるお方であることを示された。そして、神の王国が到来した際、神の原則に従順となり、その時に心からイエスを信じたすべての人々に、イエスは永遠のいのちを与えることになる。

復活によって人類がよみがえることをマルタに確信させた後、イエスは彼女に「これを信じるか」と尋ねた。マルタは「はい、主よ。あなたがキリスト、神の子であると信じます」と答えた。（ヨハネ11:26, 27）。マルタは、約束されたキリスト、すなわちメシアが、人類を死から救うためにこの世に遣わされ、それが死の眠りにについているすべての人々（ ）の目覚めによって成し遂げられることを、正しく理解していた。彼女は、イエスの中に「復活と命」があると信じていた。

## ラザロの復活

マルタは、イエスがメシアであり、死者を生き返らせる力をお持ちであることを告白した後、家に戻り、マリアにイエスに会いに行くよう頼んだ。マリアはそれに応じた。イエスは、この悲しみと大きな喪失の光景に心を動かされ、他の人々と共に涙を流された。それから、ラザロが葬られた墓に案内してほしいと求めた。ヨハネ11:28-35

墓の前に立ったイエスは、入り口の石をどかすよう命じられた。するとマルタは異議を唱えた。彼女は以前、イエスが兄を生き返らせることができると信仰を告白していたが、今は疑い、イエスに言った。「主よ、もう四日も死んでいるので、悪臭がしています。」（ヨハネ11:39）。イエスにと

って、これは問題ではなかった。イエスはラザロを通して、死んだすべての人々のために神の力が最終的に成し遂げることを示そうとしていた。神の力が働くところでは、人が四日間死んでいたか、あるいは何千年も死んでいたかなど、何の違いもない。命はよみがえらせることができるのだ。そもそも神の器として命を創造された方は、命をもどすことなど、十分にできる方である。

開かれた墓の前に立ち、ふさわしい祈りをささげた後、イエスは大声で叫ばれた。「ラザロ、出てきなさい。」（ヨハネ11:43）。この記述に何が書かれていないか注目するのは興味深い。ラザロが天国へ行って戻ってきたとは書かれていない。ラザロは天国へ行ってはいなかった。また、彼が永遠のな苦痛の深淵へ行って、その苦しみから解放されたとも書かれていない。永遠の苦痛の深淵など存在しない。

記録によれば、イエスが「ラザロ、出てきなさい……死んでいた者が出てきた」と叫んだとき、ラザロ、すなわち「死んでいた者」は、死の眠りから目覚めたのである。葬衣を脱ぎ捨てたラザロは、以前と同じように家族や友人たちと交わり、再会した。命を取り戻した彼は、幻影でも幽霊でもなかった。彼は以前と変わらぬラザロその人であった。彼は再び生き返ったことを喜び、家族も彼が戻ってきたことを喜んだ。

## 「驚いてはならない」

以前、死者の復活について語った際、イエスはこう言われた。「これを不思議に思うな。墓にいる

者たちがみな、その声を聞いて出て来る時が来る。善を行った者はいのちの復活へ、悪を行った者はさばきの復活へと。」（ヨハネ5:28,29）。ここで、ラザロが墓から呼び出されたのと同様に、すべての死者が大いなる復活の時に呼び出されることが確約されている。

ここでイエスは、復活において二つの大別があることについても語っておられることに留意すべきである。すなわち、善を行った者と、悪を行った者、あるいは善を行うことに失敗した者である。善を行った者たちは、24節において、現在の時代の「信者」として言及されている。彼らは現世において試練を無事に乗り越えているため、将来の裁きを受けることはない。イエスを信じ、その足跡を忠実にたどることで「善」を行った彼らは、死から呼び出され、「いのち」のな復活にふさわしい者と証明されたのです。このようにしてふさわしい者と証明されなかった者たちは、死から目覚めさせられ、裁きを受けることになります。なぜなら、彼らの目覚めは、この世の千年の裁きの日に起こるからです。使徒17:31；ペテロ第二3:8；黙示録20:6

ヨハネ5:29で「裁き」と訳されているギリシャ語は「クリシス (krisis)」である。今、命に値する者と証明されていない者は皆、死の眠りから目覚めた時、危機に直面することになる。もちろん、その時、彼らはその問題について完全に啓示を受けることになる。彼らには、完全な理解に基づいて、キリストを通して彼らのために用意された命の備えを受け入れ、その時すでに全人類の事柄を統

治しているであろうキリストの義の王国の律法に従う機会が与えられる。もし彼らがそれを受け入れ、従うならば、彼らは人間としての完全な命に回復され、永遠に生きるだろう。これが彼らの完全な復活となる。もし彼らがそれを受け入れ、従わないならば、彼らは死へと戻されることになる。そのことについて、ペテロは従わない者たちは民の中から「完全に断ち切られる」と述べた。使徒行伝**3:23**

キリストと共に生き、支配するにふさわしいと証明された、この時代の信者たちは、復活の際、「栄光と誉れと不死」へと現れるであろう。（ローマ人への手紙**2:7**）。したがって、不死は人間に本来備わっている性質ではなく、イエスと共に生きることができるようにと、イエスと共に苦しみ、死ぬことをいとわない者たちに与えられる栄光ある報いであることが分かる。イエスの王国における共同相続人として、彼らはまた、その裁きの期間中、イエスと共に裁きを行う者となる。コリント人への第一の手紙**6:2**；ヨハネの黙示録**3:21**；**5:10**

これは、なんと神の計画の幸福な完結であろうか！エデンの園におけるアダムの背きによってもたらされた罪と死の支配は、永遠に続くことにはならない（ ）。この長い嘆きの期間の間に死んだすべての者は、目覚めさせられ、神の律法に従い、地上で永遠に生きるという個別の機会を与えられるのである。

これは人類にとって輝かしい希望であり、神の預言者ダビデはそれを象徴的かつ美しく表現してい

る。引用する。「諸国に告げよ、『主は王となられた』と。世界は堅く立っており、揺るがされることはない。主は民を公平に裁かれる。天は喜び、地は楽しみ、海とそこにあるすべてのものは鳴り響け。野は喜び躍り、その中のすべてのものは喜び、森のすべての木は喜び歌え。……主は地を裁くために来られる。主は正義をもって世界を裁き、その真実をもって民を裁かれる。」（詩篇96:10-13）。確かに、死後の命は存在する。なぜなら、神の力によって死者は命に甦るからである。これこそが、神の御言葉によって私たちに示されている偉大な希望である。